

9

ある晩のことです。
あこやが笛を吹いていると
どこからともなく
一人の若者が現れ、あこやに言いました。
「お姫様の美しい笛に誘われて参りました。
いま少しお聞かせください。」



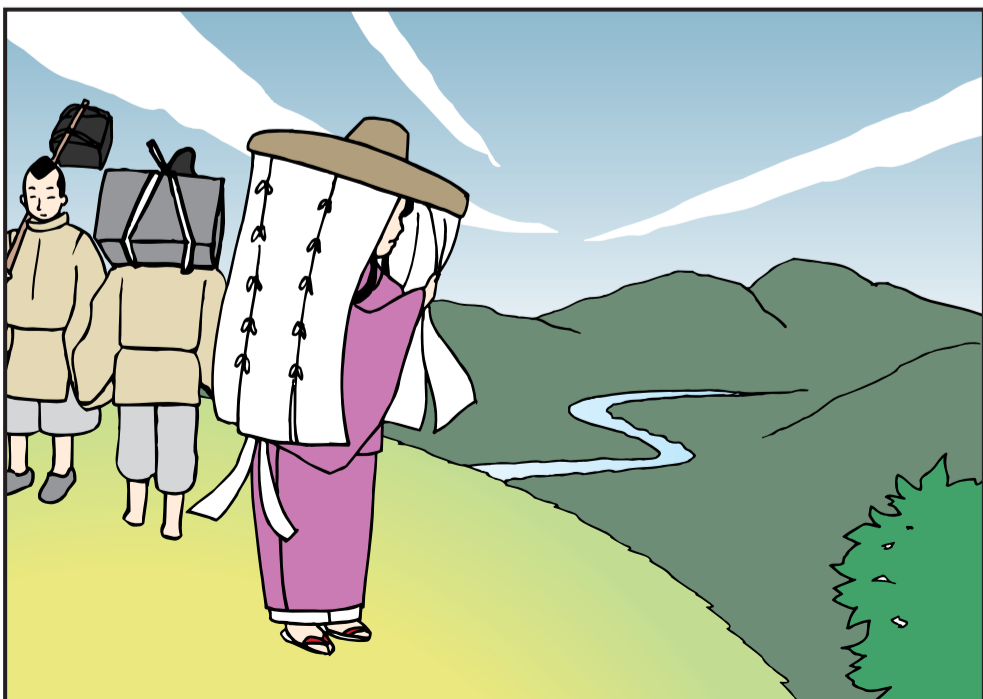
10

その日からあこやが笛を吹くたびに
若者は必ず現れるようになりました。



11

いつしかふたりは
お互いを慕うようになりましたが、
若者はなぜか日に日にやせほそり、
弱っていくようでした。
そんなある日のこと。
若者が現れ悲しそうにあこやに言いました。
「悲しいことですが、私は明日からここに来れなくなり
ます。私の言葉を忘れないでいてほしい。」
「姫がここを離れ、お父上の墓参りに向かう途中、
村人たちが難儀していたら話を聞いて笛を吹いて
ください。」
そう言葉を残し、若者は立ち去って行きました。



12

次の日からやはり若者は姿を見せなくなりました。
何度笛を吹いても、
会うことはかないませんでした。
あこやは嘆き悲しみ、
なかなかそこを離れることが出来ませんでした。
しかし、
「父上のお墓参りに行かなければ…」
あこやは思い出の集落を後にして
出羽の国へと出発しました。